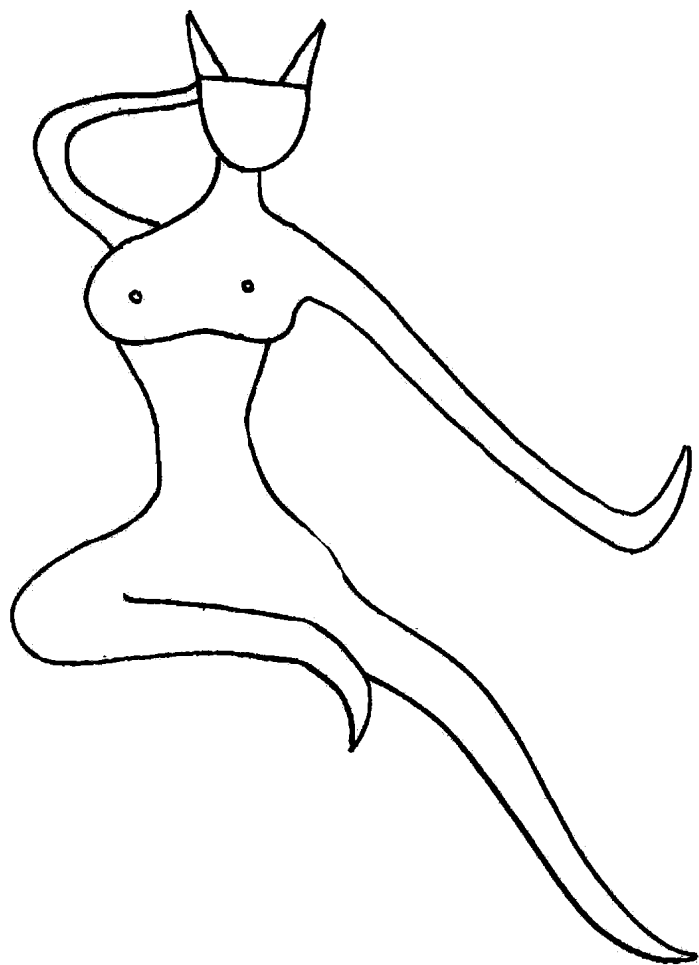


羅刹女國

井上靖



羅刹女國



井上靖

文藝春秋新社

請

羅刹女國奧附
昭和四十年一月一日發行

著者井上靖發行者上林吾郎本
文印刷所株式會社理想社印刷
所附物印刷所凸版印刷株式會
社製函所株式會社加藤製函所
製本所和田製本工業株式會社
發行所株式會社文藝春秋新社
東京都中央區銀座西八丁目四
番地振替口座東京七八七四三

定價五百八拾圓

目次

羅刹女國

五

僧伽羅國緣起

二七

宦者中行説

三〇

褒姒の笑い

三七

永泰公主の頸飾り

三七

塔二と彌三

三五

明妃曲

一四七

裝幀
杉本健吉

羅刹女國

羅刹女國

昔寶州に屬する小島に一大鐵城があり、そこに五百の羅刹女が棲んでいたという記述でこの説話は始まつている。寶州というのはどこかよく判らないが、まだ天竺と呼んでいた頃の古代印度の州縣の名に寶州というのが見えており、それは現在の印度の逆三角形の最突端部、つまり最南端附近の一地域を指していたかに思われるので、この物語の舞臺となつている羅刹島は當時の獅子國、現在のセイロン島附近に散在している小島の一つと考へていいであらう。

鐵城は島の北端に迫つてゐる低い丘陵の背にあつた。鐵城と稱ばれてゐたが、鐵の城ではなく赤銹色をした硬質の石で造られており、晴れた日は天日に赤く灼き、曇つた日は同じ城とは思われぬ程不機嫌に黒つぽく黙した。月明の夜は青色の中に微かに金粉を振り撒いたように見え、遠隔の地からも容易にこれを望むことが出來た。

城樓の上には一年中二つの高幢が立てられてあり、羅刹女たちはそれで吉凶を卜し

た。吉事あれば吉幢動き、凶事あれば凶幢が動いた。羅刹女たちは船が島に漂着する度に、變じて美女となり、香華を持し、音樂を奏して、渚に難破人たちを出迎え、誘つて鐵城に入り、大いに款待して情を結んだ。そして男と同棲しているうちに男の心に己れを疎んずる心の動くのを見ると、忽ちにして男を鐵牢中に繋ぎ、これを啖うのを常とした。

とある年のある日、城樓の吉幢大いに動いた。動くことしきりで、曾てこのように烈しく吉幢の動くのを羅刹女たちは見たことがなかつた。城樓から望むと大型の帆船が渚に打ち上げられており、その周圍に夥しい數の船夫たちが群つていた。船は明らかに難破船で、何本かの大小の檣柱は孰れもへし折られ、帆布がそれに海藻のように纏いついて海風にはためいていた。

羅刹女たちは次々に鐵城の階段上に姿を現し、海濱の方を望み、そして次々に階段を降りて行つた。階段の中途七段目から羅刹女たちは美女に變じた。最初の三十人が香華を持し、それに續く三十人が音樂を鼓奏し、あとに隨う者は妖眉を描き、艷脣を

塗つた面を伏せて、嬌惑の姿態で靜かに濱に向つた。女たちの先頭が渚に到つた時、まだ鐵城の階段を羅刹女たちは次々に降りており、その長い列はいつ果てるともなく續いていた。

女たちは一人ずつ男を誘つて來ると、大きく開かれてある鐵城の表門からはいつた。五百の羅刹女の最後の一人である羅刹の女王が渚に到り着いた時、難破人の方もソウカラと呼ぶ船の若い首長一人になつていた。五百の羅刹女の盡くが城を出たのは、惡鬼がこの地に城を構えてから初めてのことであつた。

その日からソウカラは羅刹の女王と鐵城内の館に住み、その他の船員たちは盡く丘の中腹や、その麓や、はては渚近いところにまで假屋を造り、そこに住んだ。ために、島の北端部一帯は聚落を形成し、都邑のような賑わいを呈するに到つた。

島の生活は難破人たちには充分樂しかつた。食べものは盡く女たちが調べてくれた。海には魚類が豊富にあり、丘には強烈な芳香を放つ漿果が取りきれない程澤山あつた。夢のような愉快に充ちた一カ月程が過ぎた頃から、男たちは毎日のように渚に集り、

若い首長の指揮のもとに難破船修復の仕事に當つた。船體の破損は甚しく、どのように修理しても、何百里かの海洋を隔てている郷國までの航海に耐える船が、果してできるかどうか誰にも判らなかつた。

島の生活が始まつてから三月目に、ソウカラはついに自分たちをこの島に運んで來た船を棄て、新しい船を新たに建造することを提案し、部下の者たちの同意を得た。この頃から少しずつ男たちの毎日には忙しくなつた。密林に分け入つて大木を伐採し、それを運搬し、船材にし、船を組立てる勞働が彼等に課せられた。併し、男たちは勞働から解かれ己が住居に歸ると、女たちから充分慰められた。女たちは男たちがこれまで知つてゐるいかなる女たちよりも優しく奉仕的であつた。男が指一本怪我しても、その男の配偶者は己が全身の傷つくのも厭わず、一枚の藥草の葉を求めるために密林の中に分け入つて行つた。

こうしたことは羅刹女たち總てに見られることで一人の例外もなかつた。羅刹女たちがこのように愛情深く優しくあることには、一つの理由があつた。羅刹女たちは一

名速疾鬼と言われるくらいで天空を飛翔することができ、それと人間に變ずることの二つの力を與えられていたが、その他にもう一つ人間の女の姿に變じ、それを千日變えないでいると、そのまま人間界の女になり了てしまうという宿命を背負わされていた。併し、羅刹の女たちでこれまでに人間の女になり了てることができた者はいなかつた。千日もの長い間、人間の女を持ち人間の女の姿で居續けることは至難のことであつた。人間の女に變じていても、彼女等本來のものである羅刹の心はいつでも頭を擡げようとしていた。いつたん羅刹の心が頭を擡げたが最後、忽ちにして、彼女等は本來の夜叉の姿に立ち戻り、男たちを鐵牢の中に繋ぎ、それを啖わずにはいられなかつた。

男たちは自分と同棲している女が、これ以上優しい眼はないといった眼眸をして、次のように言うのを何回となく聞いた。自分はあなたのためなら、どんな苦しいことにも耐えるだろう。あなたの生命を救うことが出来るといふのなら、いつでも悦んで自分の生命を棄てることができる。が、ただ一つお願いしたいことは、決して他の女

に心を移すようなことはしないで貰いたい。他の女に心を移したり、他の女に通じたりすると、自分はあなたに對していまのように優しい女ではあり得なくなるだろう。

男たちはみんな自分の女の口からそうした言葉がいつどのような時發せられるかをよく承知していた。従つて、女たちが限りなく優しく愛情深い眼眸をすると、男たちは女たちが言おうとする言葉を、代つて自分の口から出したりした。

一年は瞬く間に過ぎた。女たちは次々に女兒をもうけた。鐵城の聚落には到るところで嬰兒の泣聲が聞えた。羅刹の生んだ子であつたが、人間の子と少しも違わなかつた。ただ異とするに足ることは生れる子供たちが全部女兒であつて、男兒がひとりもないことであつた。男たちの間では、これが話題になることがあつたが、併し、この島が女ばかりの國であるということ、もともと荒くれた魂以外何の持合せもない難破人たちの間では、特に怪しむところとはならなかつた。

ソウカラも亦女兒をもうけた。ソウカラは毎日のように部落を巡回し、自分の部下である男たちの働きぶりを見たり、彼等の間にひつきりなしに起る悶着を處理したり

した。ソウカラは子供が生れるまでいつも一人で部落を巡回していたが、子供が生れてからは、子供を抱いた己が同棲者を伴うことが多くなつた。脣が紫色で、決して笑ふことのない女兒であつたが、ソウカラはやはり可愛かつた。脣が紫色で、笑ふことのないのは、ソウカラの子供に限つたことではなく、他の子供たちも全く同じであつた。

女たちは、難破人たちがこの島に居着いて一年程経つた頃から一年半の間にかけて次々に出産した。そして五百人の女たちの殆ど總ての者が母親になつた頃から、ソウカラは自分の見廻る部落に、多少首をかしげずにはいられぬようなことが起つているのに氣附いた。それは自分の部下のある者が同棲者もろとも突然姿を消していることがあることであつた。きのうまでは確かにそこで生活していた筈なのに、今日行つてみると家はもぬけの殻となり、男の姿も女の姿も掻き消すように見えなくなつてゐる。そのようなことがあつた。初めは仲間と喧嘩でもして他處へ家を移したぐらいに思つていたが、少し注意してみると、姿を消している男は二人や三人ではなかつた。ソウ

カラはそのことを自分の同棲者に話すと、この鐵城のある島の南海岸には賑やかな都邑があるので、男たちはこの生活を嫌つて、女を連れて、その地方に移つて行つたのであらうと言つた。そして、ただそこへ行き着くには猛蛇が棲息する大沼池を越えなければならぬので、逃亡者たちの總ては途中で死んでしまつたと見るほかはない。従つて追手を出すのは無駄であらうということであつた。

そう言われてみると、そうかも知れないと、ソウカラは思つた。この大きな鐵城のある聚落の生活も、食べるには不自由ないと言つても、ただそれだけのことで、必ずしも満足できるものではなかつた。歸國のための船の建造はその完成までにはまだ一年以上の日子を必要としていたし、たとえ船が竣工しても、果してそれで大海を乗り切れるものかどうか判らなかつた。そうしたことに思いを致すと、歸國を諦めて、この島に住みついてしまおうという考えを持つようになるのは自然であつたし、ひと度そう決心してしまふと、何もこの鐵城のある聚落に留まつていなければならぬということではなかつた。もつと他に人間らしい生活ができるところがあるなら、そこへ移り

住みたいと思うのは極めて自然なことであつた。

島の生活が二年になつた時、逃亡者の數は半數になり、二年半になつた時は三分の二を越え、聚落の渚で毎日決まりきつた船造りの仕事に携わつてゐるのは僅か百人餘りとなつた。聚落はめつきり淋しくなつたが、ソウカラは逃亡者のことを餘り氣にかけなかつた。本當に心から郷里へ歸ることを望んでゐる者たちだけで、船ができ上がつた日、この渚を船出しようと考えていた。併し、逃亡者は絶えることなく毎月のように何人かずつあつた。聚落に留まつてゐる者たちの總數が少くなつてゐるので、逃亡者があるとすぐ目立つた。一日のうちに二人も三人も姿を消すこともあれば、反對に十日も二十日も一人の逃亡者のないこともあつた。

聚落の男たちが七十人程になつた時、一つの事件が起つた。現在残つてゐる男たちの中で一番若い二十二歳の舵手の若者の身邊に起つた事件であつた。この若者は自分より二三歳若いまだ稚さの脱けない女と同棲していたが、女が二人目の子供を妊つていて長く臥床を共にしないこともあつて、ある夜豫てから思いを寄せていた仲間の女